

平成29年度 学校自己評価システムシート (私立 松栄学園高等学校)

目指す学校像	入学した生徒が、学習を継続的に進められ、卒業後の出口を確かなものにする学校
--------	---------------------------------------

重点目標	1 学習継続率、卒業率の維持・向上を目指す取組みの工夫をする。 2 卒業後の進路に目を向けさせ、進路決定サポートを充実させる。
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	7名
	生徒	名
	事務局(教職員)	3名

学校自己評価							
年度目標				29年度評価(5月25日現在)			
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	<ul style="list-style-type: none"> 単位制による通信制高校というシステムの中では、入学した生徒の年次が下がるほど、将来の進路に対する意欲が希薄なため、学習継続率が下がっている。結果として単位未修得で卒業がなくなる生徒もいる。そこで、生徒にとって学習が継続でき、高校の卒業率を上げることを第一の重点目標とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 通信制の根幹であるレポートの提出率を上げ維持する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が意欲的に取り組めるレポート問題の工夫をし、改訂を進める。 提出率の傾向を分析し原因把握する。 生徒に直接声を掛けることで、レポート提出意欲を喚起する。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書改訂年度に合わせたレポートの質、量の検討と問題の見直し レポート提出率の分析と把握(レポート管理システムによる) 	<ul style="list-style-type: none"> 1年次提出率 76.5% (前年 70.6%) 2年次提出率 90.2% (前年 76.0%) 3年次提出率 85.3% (前年 92.1%) 全体提出率 84.0% (前年 80.4%) 	A	<ul style="list-style-type: none"> 生徒のレポート提出への意識は前年度に引き続き上昇してきている。 期限切れの科目は前年度よりも少なかったが、提出率自体は前期に上昇した印象を受けた。計画的に進めていこうとする意志の表れであるようにも考えられる。
2	<ul style="list-style-type: none"> 単位未修得で卒業がなくなる生徒もいる。そこで、生徒にとって学習が継続でき、高校の卒業率を上げることを第一の重点目標とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 面接授業であるスクーリングの出席率を上げることで、単位修得率を上げる。 	<ul style="list-style-type: none"> スクーリング会場オープン制(会場自由受講)、視聴覚教具等の活用による面接授業時間の減免。学習の効率化を図るための工夫をする。 特別活動の多様化とその工夫を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 多くの学校行事を実施し、面接授業時間の減免機会を確保(行事実施数(57回)) 体育DVD-ROMの導入(20年度)、体育の単位修得率分析と把握(レポート管理システムによる) 	<ul style="list-style-type: none"> 体育a単位修得率 60.6% (前年 44.5%) 体育b単位修得率 56.0% (前年 54.7%) 体育c単位修得率 73.2% (前年 62.0%) 全体単位修得率 62.4% (前年 53.4%) 	A	<ul style="list-style-type: none"> 学校行事については、実施回数(機会の確保)も大切だが、それだけにとらわれず、内容も充実させていく必要がある。 会場自由受講の励めを強化し、スクーリングオープン制度をリニューアル(20年度)。その後、利用者が増え一人一人が計画的に学習を進めることができている。 体育DVD-ROMを導入後、毎年単位修得率を上げていくことができている。それに伴って減少している体育実技の参加について、目を向けていく段階に入った。
3	<ul style="list-style-type: none"> 単位未修得で卒業がなくなる生徒もいる。そこで、生徒にとって学習が継続でき、高校の卒業率を上げることを第一の重点目標とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 進級を目指すための進級時に行う履修登録者の率を上げる。 履修状況を把握し、計画的に単位修得する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習継続意欲を喚起するためのMタイムズ等広報紙の活用と生徒への直接的なアドバイスをやる。 履修状況照会システムの導入、及びその利用方法と活用について周知、アドバイスする。 ホームページを随時リニューアルする。 定期的なメール配信を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> できる通信による個人学習状況の現況確認と学習意欲喚起への助言 Mタイムズやメール配信(27年度より)による学校生活全体の周知徹底 メール配信登録は任意であるが、入学ガイダンス時にその必要性を理解してもらうことで高い登録率を確保できていると判断する。 	<ul style="list-style-type: none"> 携帯電話やパソコンによる履修状況照会システムの積極的な活用の推進(生徒自己評価による利用率は高い) メール配信登録は任意であるが、入学ガイダンス時にその必要性を理解してもらうことで高い登録率を確保できていると判断する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 今後も定期的に学習が止まっている生徒へ、直接連絡をしていく必要がある。並行して、通信制で求められる学習の「自己管理」は失わせないよう注意すべきである。また、学校外の活動が忙しい生徒について、連絡することで学校の存在を忘れないように意識付ける必要である。 電話連絡や学習相談の結果、学習再開をすることができた生徒が出てきている。今後は、具体的な履修登録率を元により成果を挙げるための取り組みにつなげていきたい。 積極的にシステムを活用し、常に学習状況を把握しようとする意識が見られる。保護者も利用可能なため、積極的な活用を求めていきたい。 何らかの事情でメール配信ができなくなってしまった生徒は合わせて学習が止まっている傾向が見られる。学習の継続に相互な関係があることを考えると、配信ができなくなってしまった生徒への早急なアプローチと継続した配信、新入学生の高い登録率はこれらも意識していきたい。

学校関係者評価
実施日 平成30年5月25日
学校関係者からの意見・要望・評価等
<p>全体のレポートの提出が上昇していることは評価できることである。また、期限切れであるかに関わらず提出率が向上したことには、生徒の学習への意欲の高さが感じられる。今後も提出率の向上につながる問題作成や、学校側のフォローの体制づくりに努めてほしい。</p> <p>スクーリングの認定機会の選択肢が複数用意されていることは、生徒が自分の状況に合わせて学習を進めていけるという点で評価できる。しかし、その選択肢が「最終的に何とかなる」と安易な発想につながらないようにしなくてはならない。まずはスクーリングへの参加を前提とした指導を行い、必要に応じてその他の選択肢を提示するような指導に取り組んでもらいたい。</p> <p>学校側の取り組みによって、学習状況に改善が見られた生徒がいることは評価できる。学習が進まない生徒への対応は、1人の職員だけでなく、校舎の教員が全員で関わっていこうとすることが大切である。そのためには、各職員が自分の校舎の生徒の情報をどのように管理し、どのように対応していくのか共有しようとする意識が大切である。また、学校からの声掛けと生徒の自己管理のバランスも大切である。学校からの声掛けに生徒や保護者が甘えてしまうことがないよう注意したい。学校通信や履修状況照会システムの周知をより徹底してもらいたい。</p>

学 校 自 己 評 価							学 校 関 係 者 評 価	
年 度 目 標				29年度評価 (5 月 2 5 日 現 在)			実 施 日 平 成 3 0 年 5 月 2 5 日	
番 号	現 状 と 課 題	評 価 項 目	具 体 的 方 策	方 策 の 評 価 指 標	評 価 項 目 の 達 成 状 況	達 成 度	次 年 度 へ の 課 題 と 改 善 策	
4	<ul style="list-style-type: none"> 通信制というシステムのため、限られたスクーリング（面接授業）の時間の枠で、生徒の進路選択に対する考え方や進路の方向性を把握することがなかなか難しく、卒業直前まで進路未定という生徒も多いのが現状である。そこで、生徒が進路の方向性を見だし、進路選択の意欲を喚起し、高校卒業後の出口を確かなものにするためのサポートの充実を第二の重点目標とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 就職希望者の内定率を増やす。 	<ul style="list-style-type: none"> 低学年時相当の段階より、進路ガイダンスの工夫をする。 就職希望者の把握を随時行い、相談体制の充実を図る。 就職について、ホームページの充実を図る。 段階的な就職指導を行うことにより、就職することへの意識の充実化を図る。 公共機関を積極的に活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 就職希望者への段階的指導を徹底、リスト化し、全校舎共通の指導を行う 生徒の適性に合った準備を進め、就職内定率の向上を目指す 就職希望者に対する就職内定率の分析把握を行い、問題を見直す 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒一人一人に対する段階的な指導を、全校舎共通で確実に行うことができた。 そのことによる就職への意識付けも行うことができた ハローワークや合同企業懇談会の積極的な活用により、就職内定を決めることができた。 就職内定率 76.92% (前年 81.67%) 	A	<ul style="list-style-type: none"> 今後も継続した就職指導を行うために、生徒に対する職員数の確保は欠かせない。 求人票の迅速な公開を全校舎共通で行い、生徒や保護者へのより良い情報提供に努める必要がある。 就職希望者が増加傾向にあるため、就職内者数だけではなく、就職内定率にも拘って指導に当たれるように教職員は共通の理解をもっていくようにしたい。 	<p>就職希望者への各職員の対応は丁寧に行えていると思う。校舎ごとに就職担当の職員を設けていることも、より丁寧な対応につながっていると思う。景気の影響もあり現在は就職活動への追い風が感じられるが、そうした中でも学校の指導体制や外部との協力体制を整えることで、景気の影響にも左右されない体制づくりをしていってもらいたい。</p>
5	<ul style="list-style-type: none"> 進路希望調査の実施により、生徒の進路への意識付けと同時に学校も生徒の状況把握をしやすくなっていると感じられる。進路資料など提供する情報も大切だが、実際生徒への啓発となるのは、希望調査や教員からの声掛けといった直接的な取り組みであると思われる。生徒の動きを見ている、自分一人で決めるのではなく、学校に相談やアドバイスを求めている場合が増えてきているように思える。また入試において、面接だけでなく課題や小論文を課す学校が増えてきており、進路指導に多くの時間を必要とするケースも出てきている。以上のことから、進路指導にかかる時間が多くなっていくことが予想、その対応に必要な人員や時間の確保をといった体制づくりに努めていってもらいたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学、短期大学等上級学校の進学者内定率を増やす。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の進路状況を把握する。 進路指導室を充実させ、相談活動の活性化を図る。 長期休業期間の相談体制の充実を図る。 進路選択に関する多様な情報の収集と生徒への提供を充実させる。 進学について、ホームページの充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 進路希望調査を実施する。 学校種ごとにOC情報をこまめに更新し、生徒へ周知徹底を図る。 生徒の適性に合った準備を進め、進学内定率の向上を目指す 進学希望者に対する内定率の分析把握を行い、問題を見直す 	<ul style="list-style-type: none"> 進路希望調査の実施により、生徒の志望校を早期に把握することができている。そのため、具体的な進路指導を展開し、高い進学内定率を維持できている。 進学内定率 80.65% (前年 83.02%) 	A	<ul style="list-style-type: none"> 就職同様個に応じた直接的な指導を手厚くしていくことで、進学内定率を向上させることができた。 進路の相談がしやすい体制作りが求められるため、活動の工夫とPRをしっかりと行うようにする必要がある。 上級学校の資料や情報は更に充実していく必要がある。しかしながら、その資料は膨大な量になるため、しっかりと厳選して提供する。また、長期休業期間を考えて、生徒の進学希望をできる限り早く確認することで、一人一人に合った対応を確実なものにしていきたい。 	<p>進路希望調査の実施により、生徒の進路への意識付けと同時に学校も生徒の状況把握をしやすくなっていると感じられる。進路資料など提供する情報も大切だが、実際生徒への啓発となるのは、希望調査や教員からの声掛けといった直接的な取り組みであると思われる。生徒の動きを見ている、自分一人で決めるのではなく、学校に相談やアドバイスを求めている場合が増えてきているように思える。また入試において、面接だけでなく課題や小論文を課す学校が増えてきており、進路指導に多くの時間を必要とするケースも出てきている。以上のことから、進路指導にかかる時間が多くなっていくことが予想、その対応に必要な人員や時間の確保をといった体制づくりに努めていってもらいたい。</p>
6	<ul style="list-style-type: none"> 進路未決定者の割合は減少を継続している。さらに良い結果を出していくためには、生徒への早めのアプローチが大切である。2学期制の本校では、夏休みに入る前の前期中に積極的に声を掛けていく必要がある。進路未決定者でも、特に進路に関しての意識付けが全くできていない生徒がいないよう、確実に対応すべきである。 適性検査に関しては、昨年度より参加人数がやや減少したので、実施時期等なども含めて調整をしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 高校卒業後の出口を確保し、進路未決定者を減らす。 	<ul style="list-style-type: none"> 総合的な学習の時間に係るスクーリングで適性検査を実施し、受検者を広め、個人適性情報の的確化を図る。 適性に応じ、進路への意欲付けや進路選択のアドバイスをする。 個に応じた進路計画の作成を行い、自主行動を積極的に促す。その中でオープンキャンパスや体験入学への参加を薦める 	<ul style="list-style-type: none"> 適性検査実施状況を分析、結果の見方指導を充実させる。 進路決定者と未決定者を数値化し、分析把握を行い、問題を見直す 進路計画 オープンキャンパスや体験入学への参加状況把握 進路選択の為の自主行動の薦め 	<ul style="list-style-type: none"> 適性検査実施状況 56人 (前年 68人) オープンキャンパスや体験入学への参加指導 (進路指導部評価) 100% (前年 100%) 進路決定率 82.9% 	A	<ul style="list-style-type: none"> 進路未決定者の割合は減少を継続している。さらに良い結果を出していくためには、生徒への早めのアプローチが大切である。2学期制の本校では、夏休みに入る前の前期中に積極的に声を掛けていく必要がある。進路未決定者でも、特に進路に関しての意識付けが全くできていない生徒がいないよう、確実に対応すべきである。 適性検査に関しては、昨年度より参加人数がやや減少したので、実施時期等なども含めて調整をしていきたい。 	<p>進路未決定者の減少は望ましいが、生徒の状況により、未決定がいたしかたない場合もある。そのため、単純に数字だけの判断ではなく、未決定者それぞれの状況をもって、未決定者数に対する判断をしてもらいたい。また、卒業して時間が経ってから動き出す生徒もいるので、卒業後も相談しやすい環境づくりに努めてもらいたい。</p>